# 私のモチーフ
# 「ココニイル」子ども達からの贈物

会員　秋吉ヤス子

まだ会友にもなれなかった頃は、絵とどう向き合っていくべきなのか分からず悩んでいた時期で、次に描く絵のモチーフが決まらず行き詰っていた頃でもありました。そんな時に久留米支部の会員の先生がみかねられたのでしょう。「あなたの身の周りの事を描くとよ。探してんね。一杯あるけん。」と声を掛けてくださいました。先生は何をおっしゃっているのだろう?私の身の周り、何がある?ちょっと疑問符がつきましたが、そうか職場で探してみようとまず思い当たりました。当時私は、保育所から放課後学童クラブ、所謂学童保育所へ転職したばかりでした。学童保育所は久留米市内45校区の小学校に設置されており、そこで働く支援員は異動もあります。数ヵ所の小学校の学童保育所で勤務出来た事は、より沢山のモチーフと出会える事となり、モデルになってくれた子ども達には感謝感謝です。

学童保育所や小学校の施設内でまず目についたのが靴と靴箱です（作品①）。靴は様々な表情をみせてくれました。部屋に入る際、乱暴に脱ぎっぱなしにされた靴や、帰宅した放課後に残された上靴をみていると、その子達がそこで生活していた息づかいが感じられる様でした。僕達はここにいたよと言っているようにもみえました。実際に子どもを描かなくても、持ち主である子どもの存在がわかる様に思いました。

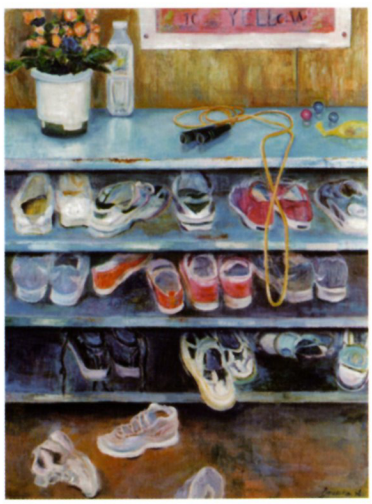
傘（作品②）も興味深いモチーフでした。ある小学校の傘立てには忘れ物の傘が沢山集められていました。もちろん雨の日には傘はもっと増え大賑わい。玄関の片隅、薄暗い場所にカラフルな色の氾濫。この色のリズムを描けたら楽しいだろうと構成し描くのですが当時は、ただ写し取る事に無我夢中でした。靴箱や傘立て、どこをどう切り取るかでもっと違った作品になり得た事を思うと、これが私の精一杯だったと思います。数年は、靴や傘を描き、その持ち主の子どもの存在を感じてもらえる様な絵作りをしていたのですが、続けていると物足りない思いが増してきました。そこで生活している子どもの姿が必要だと。実際に靴箱の前に子どもが立つ事で、もっと絵が強くなり主張してくると思えるようになったのです。少しずつですが前進する為には必然でした。

「ココニイル」（作品③）これは私にとって、とても大切な一枚です。地塗りには様々な色を入れていた私は、地塗りした色を残し靴箱を描く。挑戦でした。地色の赤が残っていても靴箱は靴箱として存在しました。概念的な色にとらわれず自分の思いを込めた色で表現する事。とても楽しい面白い作業でしたが、どう受け止めてもらえるのか不安でした。この赤い色の使い方について、6月にお亡くなりになった樋口洋先生のご指導が心に残ります。またTシャツの黄色の使い方も同様で先生のご指導、忘れられません。この絵からずっと子どものTシャツの色は黄色になりました。

▲「ココニイル」（作品③）（2008）

▲「雨の日」（作品②）（2008）

▲「放課後」（作品⑤）（2019）



▶「僕らは此処にいる」（作品①）（2001）

▶「それぞれのストーリー」（作品④）（2013）

「それぞれのストーリー」（作品④）壁を描くように人物も描かないと、と指摘を受け続けてきていました。壁を描いている時は楽しくて思いのままやれるのですが、人物になると緊張してしまい思う様に描けません。そんな中で、ようやく納得できる一枚となった作品です。まだまだ完全ではありませんがこの絵を描いた時の勇気を行き詰った時に思い出すようにしています。

「放課後」（作品⑤）男の子ばかりを主に構成し描いていたのですが、女の子を登場させた事で物語が増えてきて自分でも驚いています。それぞれが持つ特性や役割を考え構成するとまた世界観が広がりました。

私がこれまで絵を描き続けてきたのは、私はココニイルという自己表現にほかありません。子どもを描きながらも靴箱の前に立っていたのは私自身だった様に思います。もう少しこの現場に居られそうです。私には乗り越え困難な課題ですが、子どもの内なるもの、子どもの存在感を描きたいとの願いを持ち続けこれからも描いていきたいと思います。